

◎事例から見る総合的地域開発の概念と課題(海外・他都市)

① IBAエムシャーパーク(ドイツ)のコンセプトと運営方法

■永松 栄

1 ルール地域とIBAエムシャーパーク対象地域の位置と概況

デュッセルドルフを州都とするノルトライン・ヴェストファーレン州は一九八九年から一九九九年のタイムスパンを設定して、ルール地域内エムシャー川流域の環境と経済の再建に取り組んでいる。これは、国際建築展(IBA)エムシャーパークという名の重点プロジェクトで、国際建築展という方法を広域都市圏再生に応用したきわめてユニークな地域開発事例である。このプロジェクトの本質的な部分として国際建築展方式事業と広域都市圏再生という性格があるが、ここでは広域都市圏再生の舞台となっている地域の概略から説明する。

① ルール地域の工業化の経緯

ドイツの心臓ともいわれてきた一大工業地帯を有するルール地域は、地域西部を南北にゆったりと流れるライン川を頼るべき輸送動脈として発展してきた。このルール地域のライン川支流はリッペ川、エムシャー川、ルール川である。

この地域は近代化以前にも幾つかの街道都市が存在していたが、鉄鉱石や石炭の採掘が活発化する十九世紀以降、ドイツの近代化と歩調を合わせて急速に輸送網、産業施設、定住地が整備された。

ルール地域の鉱山施設は、エムシャー川流域とルール川流域に集中している。南側のルール川は川幅もあり船舶運行可能な河川であったため、このルール川流域から鉱山開発が進み、工業地域化もこちらから進んだ。

② 広域都市圏形成の経緯と特徴

エムシャー川はルール川と比べるとはるかに貧弱な川であったため、ライン・ヘルネ運河の整備を待つて鉱山開発が進むことになった。しかし、この遅れて開発されたエムシャー川流域は、ルール川流域にまさる東西に伸びる一大鉱工業地帯となっていく。十九世紀末から第二次世界大戦までの期間に大規模な労働者コロニーが転々と開発され、ドイツではめずらしい、連鎖型の大規模市街地を形成するようになった。

大都市周辺の広域都市圏化は同時期において、欧米都市ではめずらしいものではなくなっている。しかし、通常の発展形態は中心となる都市が存在し、これが周辺の小さい自治体を合併したり新たな広域行政体を生み出すことで、拡大する領域の管理を一元化していた。

- 1 ルール地域とIBAエムシャーパーク対象地域の位置と概況
- 2 IBAエムシャーパークのコンセプトと運営方法
- 3 IBAエムシャーパークのワーキングファイルと個別プロジェクト
- 4 IBAエムシャーパークから発想する総合的开发

これに対して、ルール地域にはもともと都市らしい都市というのはエッセンやドルトムント程度で、あとは村や町に相当するものが領域を運営していた。こうした状況の中で、第一次大戦後のドイツの経済復興を目的にしたルール地域の生産力増大が国家事業として推進されることとなった。新たな都市構造は全体としてエッセンやドルトムントを中心とするものとはならず、ひたすらエムシャー川とライン・ヘルネ運河、そしてこれと並行に走る何本かの鉄道路線に沿う東西方向の連鎖型市街地の帯となった。

こうした経緯で、広域都市圏の産業インフラやライフラインなどに関する総合的管理は、通常を中心都市の行政管轄拡大ということでの対応ではなく、自治体が行政連合をつくるということでの対応が試みられた。この連合は「ルール石炭地域連合」と呼ばれ一九二二年に結成されている。

③ 近年のルール地域の状況

ルール石炭地域連合は一九七九年に「ルール地域自治体連合」へ改組され、十一都市と四郡が正式メンバーとなった。この圏域は、一九九三年現在で面積四千四百三十四平方キロメートル、人口五百四十四万六千人で、一平方キロメートル当たりの人口は千二百二十八人にも達し、ドイツにおいては群を抜く巨大人口集中地域となっている（ちなみに東西統合後のベルリンの人口は三百四十万人である）。土地利用の状況は市街地（公共施設用地を除く）二一・五％、公共施設用地九・四％、農地四三・二％、森林一七・三％、その

他八・六％となっている。

第二次世界大戦後、世界のエネルギー源の主流が石炭から石油に転換したこと、ドイツの工業自体が鉄鋼生産に代表される重厚長大型から機械・自動車関連やハイテク関連のような付加価値型に転換したことは、この地域の斜陽化と連動した。こうして鉱山施設と鉄鋼関連施設を中心に、産業施設の閉鎖に歯止めがかからない状況となったのである。

④ IBA関連自治体の概況

現在IBAエムシャーパークの舞台となっているのは、ルール地域内十一都市の内九都市と、レクリンクハウゼン郡内の五町、ウンナ郡内三町で、面積にして八百平方キロメートル、人口二百万人規模の圏域である。

この圏域の設定はエムシャー川とライン・ヘルネ運河に沿って形成された東西五十キロメートルほどの高密度に連担した市街地の帯であり、ルール地域の中でも最もルール広域都市圏の特徴を示す鉱工業地帯である（図一参照）。

ルール地域をはじめとする重厚長大型産業地域を産業基盤とするノルトライン・ヴェストファーレン州は一九八〇年代を通して失業率の上昇に悩まされた。一九八〇年八月までの間に州全体失業率が五％から一〇％に推移したのに対し、IBA関連自治体における失業率は、六％から一六％に急上昇している。

2 IBAエムシャーパークのコンセ

プトと運営方法

冒頭に述べたとおり、IBAエムシャーパークというのは州政府の重点プロジェクトであり、その動機は対象地域の高失業率に現れる社会経済問題の克服であった。

また、ノルトライン・ヴェストファーレン州は従来、ドイツを牽引する工業州を自負していたが、戦後、自動車産業やエレクトロニクス及びハイテク産業で急速にシュトゥットガルト圏域やミュンヘン圏域に先を越される状況に焦りを感じていた。また、ドイツ連邦政府が主導する欧州通貨統合がなされた場合は同州の経済地盤はさらに沈下するのではないかという観測があったはずである。このようなことで、二十世紀の最後の十年を期して州の重点プロジェクトとしてIBAエムシャーパークが位置づけられたのである。

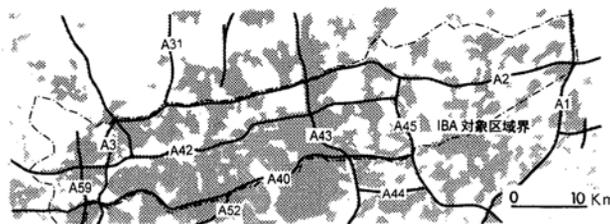
① IBA（国際建築展）運営の狙い

州の重点プロジェクトでありながら、具体的な事業名ではなく、あえて「IBAエムシャーパーク」と称されたのはなぜだろうか。

エムシャー川流域のような十七の自治体にまたがる広域都市圏再生事業なるものは前代未聞であり、このような事業を想定した財源は存在しなかった。プロジェクトの企画の段階で、新たな立法措置による財源確保も検討されたが、結局断念したということである。

これはこのプロジェクトがスタートした一九八九年当時、州の財政状況が悪かったことが単純な理由であるが、目的の異なる財源あるいは事業をエムシャー川流域に集められる確たる見通しがあったことも理由の一つである

図一 IBA対象地域の連鎖型市街地の形状と高速道路網



う。

このような背景から、州が新たに取り組みべき仕事は、新たに計画をつくり実施していくことではなく、州、地域自治体連合、自治体、公益企業等を主体とする既往の公共事業に共通の目的と戦略を持たせ、さらにこれに同調する新たな民間事業を仲間に加えていくようなコーディネートの仕事であった。

こうして、州は一九八九年にIBAエムシヤーパーク公社を設立した。この公社は、エムシヤール流域の再生をテーマとする国際建築展運営のために設立された民営形態による十年の時限付き公社で、州出資の州開発公社(LEG)とは全く性格の違う組織である。

② 国際建築展と見たIBAエムシヤーパークの特異性

伝統的に万博(EXPO)は仮設建築物による国際建築展の側面を持っているし、恒久建築物による国際建築展も二十世紀には数多く実施されている。ドイツにおいてはシュトゥットガルトのワイセンホフジートルンク(一九二七年)、ベルリンのハンザファイアテル(一九五七年)、同じくベルリンのIBA(一九七九—一九八七年)等が著名である。

一般的にいわれる国際建築展の効用は次のようなものだろう。まず、土俗的になりがちな建設プロジェクトに国際的な建築家や計画家を参入させることにより革新性や話題性を獲得する。それから共時体験の場として建設プロジェクトを活用し、国際的に共有される課題の処理に資する。これらに関連して言えることは、テーマを持たない国際建築展はあ

りえないということ、主催者側がテーマを広く訴えようとする時、有効な手段であったという実績がある。

エムシヤーパークの場合はこれに加え対象が地域再生であるという最大の特異点がある。個々の建築や公園の計画に国際コンペを多用して国際的な催しとするのと並行して、地区整備計画や事業計画の決定プロセスに透明性を確保していくという役割を付加しているようである。

こうしたことから国際コンペの支援と計画や事業プロセスの情報発進が、IBAエムシヤーパークのプロジェク運営の仕事に含まれている。

③ IBAエムシヤーパークの運営方法

IBA公社の設立の前後にだされた担当大臣の声明は、「ノルトライン・ヴェストファール州はエムシヤール流域の経済と環境の再生のために国際建築展を実施する。同時に地域に協力を求める」というものだった。これに基づきIBA公社が初期に手がけた仕事は、IBA公社自体のワーキングフィールドの設定であり、これはそのまま国際建築展のワーキングフィールドとなるものであった。

次の仕事はIBAプロジェクトの要件づくりとIBAプロジェクトの募集、審査登録で、結局、八十あまりの個別プロジェクトが登録された(図1参照)。登録が整うと、個々のプロジェクトに対する知的支援と要件監理を行うことになる。この知的支援の重要な部分は国際ワークショップや国際コンペを支援

し、特に今後、社会的に役に立つであろう「疲弊した環境の回復技術」であるとか「一般建築の環境共生技術」に関する情報の交流と共有を促進するというものである。当然こうしたこととの関係の中で、定常的な広報の仕事が大きな比重を占めている。

IBA公社の組織は大きく三層構造になっていて、最上部はいわゆる出資者側からの監督を受け止め公社全体の管理を受け持つ理事会、運営委員会、総務局である。中間層には実質的な指揮をつかさどる社長、副社長、学術顧問団が位置し、最下部はワーキンググループとなっている。一九九四年の段階で、このワーキンググループは、「広報担当」、「産業パーク・近代化遺構担当」、「ランドスケープパーク・水系自然再生担当」、「住宅・市街地整備担当」、「社会・文化活動担当」の構成であった。

3 IBAエムシヤーパークのワーキングフィールドと個別プロジェクト

現在のIBAエムシヤーパークのワーキングフィールドのグルーピングは、「①エムシヤール・ランドスケープパーク」、「②エムシヤール系の自然再生」、「③近代化遺構の保存と活用」、「④ワーク・イン・パーク」、「⑤住宅と市街地の整備」である。

① エムシヤール・ランドスケープパーク

このワーキングフィールドのプロジェクトは大きく二つのタイプに分かれる。一つはルール地域自治体連合がIBA関連自治体の

図一 3 IBA対象地域の緑の帯



図一 2 IBAプロジェクトの分布

